

日本子ども学会 学術集会

第17回「子ども学会議」報告

テーマ「子どもらしさって、なあに？」

「ぼくらしさ・わたらしさを知っている？」

身体に不自由のある子どもたちの支援を通して発達とは何かを考える

日程：2021年 10月23日(土)・24日(日)

会場：滋賀県立大学(滋賀県彦根市)



Program プログラム

1 日目

10月23日(土)



10:00 開会式

10:10 大会長講演

「障害のある子どもたちへのPlayful Approach」

高塩純一 (大会長・びわこ学園医療福祉センター草津)

11:00 教育講演

「福祉の思想」

渡部昭男 (元神戸大学発達科学部教授)

司会: 口分田政夫 (びわこ学園医療福祉センター草津施設長)



12:00 昼休み

13:00 会員総会

13:40 シンポジウム

「子どもと環境をどのようにつなぐのか」

鯨岡 峻 (京都大学名誉教授)

細田直哉 (聖隷クリストファー大学准教授)

山口和也 (社会福祉法人ウイング)

天田美恵 (滋賀県立小児保健医療センター作業療法士)

桐山伸也 (静岡大学情報学部教授)

座長: 岸本 眞 (宝塚医療大学 和歌山保健医療学部教授)



16:00 ポスターセッション Web



滋賀県立大学 (滋賀県彦根市)。
写真左手の交流センターが第17
回子ども学会議の会場となった。

2日目

10月24日(日)

9:00 特別講演

「涙も笑いも、力になる」

副島賢和 (昭和大学大学院保健医療学研究科准教授)

司会: 高塩純一 (びわこ学園医療福祉センター草津)



10:40 パネルディスカッション

「早期電動移動機器使用が子どもたちの発達に及ぼす影響」

西島和秀 (聖ヨゼフ園作業療法士)

篠原 勇 (与謝の海支援学校教諭)

安田寿彦 (滋賀県立大学工学部教授)

濱田知加 (当事者の親として・保健師)

コーディネーター: 船橋篤彦 (広島大学大学院講師)



10:40 自主シンポジウム

(パネルディスカッションと同時並行・別会場で開催)

12:00 昼休み

13:00 市民公開講座

クロストーク「重い障害のある人の親とともに考える支援のあり方」

児玉真美 (日本ケアラー連盟代表理事)

司会: 木下 真 (福祉ジャーナリスト・日本子ども学会事務局長)

14:40 市民公開講座

「子どもたちからのSOS」

悠々ホルン

司会: 松嶋秀明 (滋賀県立大学教授)



16:00 理事長講演

「これからの障害児支援を考える」

榊原洋一 (お茶の水女子大学名誉教授)



16:30 閉会式

「第17回子ども学会議」を終えて 報告と御礼

大会長 高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津）

このたびは、第17回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）にご参加いただきまして誠にありがとうございました。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い2020年に開催予定であった子ども学会議がオリンピックと共に1年延期になり、2021年10月23・24日に無事に対面とWebでの同時開催することができました。コロナ禍にも関わらず100名強の会場参加と200名弱のWeb参加という例年以上の皆様にご参加いただきました。これも会場を提供していただいた滋賀県立大学と実行委員長の安田寿彦先生をはじめとするスタッフの皆様のご尽力の賜物であります。改めてこの場をお借りしまして御礼申し上げます。

本学術集会では、「子どもらしさって、なあに？ ほくらしき・わたらしきを知っている？ -身体に不自由のある子どもたちの支援を通して発達とは何かを考える-」をテーマに1つの教育講演とシンポジウム、1つの特別講演とパネルディスカッション、3つの自主シンポジウムと市民公開講座を企画いたしました。

このテーマに至った経緯は、日本赤ちゃん学会主催『第2回新・赤ちゃん学国際シンポジウム』の「認知機能の発達:発達心理学からの提言」におけるCampos教授の講演がきっかけです。それまでの小児リハビリテーションでは、子どもや家族の気持ちに寄り添うことよりも正常運動発達を促すための促通主義が中心でした。今回、子どもと家族が見えている景色、支援者の見ている景色のすり合わせをする中で、皆様の心に何かが刺さったのではないかと思います。

1日目の教育講演では、「福祉の思想」をテーマに糸賀一雄先生の足跡をたどりながら支援とは何か、その根源に触れました。シンポジウム「子どもたちと環境をどのようにつなぐのか」では、当事者を含めた5人のシンポジストから環境支援という切り口から子どもへのアプローチを語っていただきました。

2日目の特別講演「涙も笑いも、力になる」では、病弱児教育にかかわる中で、子どもたちからの言葉をどう受け止めるか、支援者にとって大きな気づきがありました。パネルディスカッション「早期電動移動機器使用が子どもたちの発達に及ぼす影響」では、当事者家族の話を皮切りにエンジニア、支援者と発達に及ぼす影響をそれぞれの立場で語っていただきました。市民公開講座では、当事者家族（ケアラーの問題）、子どもたちのSOSと支援を受ける側から見える世界を語っていただきました。

ポスター発表は3グループに分かれて計43の発表がWebで開催されました。また会場には、親御さんが作られた移動機器の展示、Kids Loco Projectとの共同開発をしたBaby LocoとCarry Locoの展示もされました。

新型コロナウイルスという私たちが今まで経験をしたことがない環境のなかで、会場での開催が危ぶまれる中、徹底した感染対策をおこなったことで、1人の感染者を出すこともなく無事に開催できたことが何よりの成果であったと思います。

この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

大会長講演

障害のある子どもたちへの Playful Approach

高塩純一（大会長・びわこ学園医療福祉センター草津）

本来、子どもはその時々で必要なニーズを持っています。そのため子どもたちに必要とされる支援の内容も徐々に変化していきます。子どもにとっての学びは、遊びの中から育まれます。学ぶ意欲を発動させるためには、わくわくするような遊びが不可欠です。では、誰が子ども一人ひとりのニーズを読み取って、必要とされている支援(遊び)を提供できるのでしょうか。

医師であると同時に当事者でもある熊谷晋一郎は、第5回日本小児理学療法学会学術大会2018の特別講演Ⅱ「動きの誕生～身体外協応構

造」のなかで「運動障害があるために靴下を履くのに2時間かける必要はない。更衣を支援してくれる人的介護支援があれば、その時間をもっと有意義に過ごせばいい」と説きました。加えて医学的リハビリテーションといえど「個」の機能障害や能力障害に対する「治療ではない」とも述べました。その言葉は、障害は克服するものではなく、その障害とうまく付き合いながら豊かに暮らす方法を考えることにつながります。

WHOは、2001年にそれまで一方向性に考えられていたICIDH（国際障害分類）からICF（国際生活機能分類）にその考え方を变化させました。しかし、子どもの場合には不十分であると考えたDr. RosenbaumとDr. Gorterは、2011年にThe 'F-words' in childhood disability: I swear this is how we should think! という衝撃的な論文を発表しました。



子どもたちの困りごと（障害）は、決して身体の内側だけにあるのではなく、身体の外側にもあります。公共施設に洋式トイレやおむつ交換ができるための大きなベッドが無いことで、子どもたちが外出の機会を制限されているという障害の捉え方を「社会モデル」と呼びバリアフリー化などの社会的変革が求められます。

子どもたちが自立していくためには、依存先を増やすことが必要になります。社会全体で困りごとを抱えているすべての人たちの依存先を増やす取り組みをしなければなりません。そのためには社会全体が多様性を認めるとともに、「誰ひとり取り残さない社会」を目指さなければなりません。ダイバーシティが求められる今だからこそ、障害のある子どもたちの目線から見た世界を拓くことが重要です。



◎プロフィール 高塩純一（たかしお・じゅんいち）

社会福祉法人びわこ学園医療福祉センター草津勤務。立命館大学産業社会学部非常勤講師、関西医療学園専門学校理学療法学科非常勤講師。1982年、理学療法士免許取得。1982年～茨城県厚生連取手協同病院勤務、1985年～京都大学医療技術短期大学部理学療法学科勤務。1988年から現職。社会福祉法人宇治明星園及び株式会社ビザライ兼務。

福祉の思想

— この子らを世の光に、人格発達の権利の徹底的保障、横(軸)の発達 —

渡部昭男 (鳥取大学名誉教授、神戸大学大学院人間発達環境学研究科名誉客員教授、大阪成蹊大学特別招聘教授、糸賀一雄研究会代表)

1914年、糸賀一雄は鳥取市に生まれた。彼の筆名「因幡一碧」は「因幡(鳥取の古名)の碧色の空と海」を意味している。旧制高校時代に病気で2年間休学し、1932年に洗礼を受けた。医師志望であったが「医者は命を救うが魂は救えない!」と考え、1935年に京都帝国大学文学部哲学科に進学。卒業後の一時、京都の小学校で代用教員を務めた。病気理由で兵役を免除され、1940年に滋賀県庁の職員となった。終戦時は経済部食糧課長であった。

1946年、戦後の食糧不足の中での過労が原因で、彼は結核を再発した。どうすればよいか悩んでいる折、親友の池田太郎と田村一二が訪ねてきて、戦災孤児・貧困児・障害児のための施設・近江学園の設立を熱く説いた。彼は信仰心を激しく揺さぶられ、福祉事業による平和の希求を決意したのであった。彼らは次々に福祉施設を建設し、1963年には重症心身障害児のためのびわこ学園を開設。1968年、滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会において、講演の最終盤で「この子らを世の光に」の言葉を遺して倒れ、翌日死去した(享年54)。

1947年に施行された日本国憲法によって、天皇主権の国体は国民主権に転換した。その第3章では、「個人の尊重」「生命、自由、幸福追求の権利」(13条)、「法の下での平等」(14条)、「生存権」(25条)、「教育を受ける権利」(26条)が規定されている。にもかかわらず、多くの障害児が学校教育を奪われ、放置された。なぜなら、日本国憲法も教育基本法も「能力による制約」を認めているとの解釈が一般的だったからである。糸賀一雄も能力による教育の限界があり、重度児には永続的な保護が必要であると考えた。しかし、「事上練磨」「一隅を照らす」という東洋的な教えに誠実に向き合った糸賀は、絶えず福祉実践から学び、自らと対決し続けた。重い障害児が変化し変容する事実を目の当たりにし、1961

年にはヨーロッパを視察してノーマラーゼーションの思想と動きに刺激を受けた。同年、近江学園では職員の共同討議を経て「発達保障」が提起された。後に糸賀も「人格発達の権利の徹底的保障」「横(軸)の発達」を語っており、亡くなった1968年に刊行され、今も増刷を重ねている『福祉の思想』に収められている。



『福祉の思想』(NHKブックス)

1960年代の近江学園・びわこ学園の実践は、教育不可能とされる能力の下限を押し広げ、教育による能力そのものの変化と発現の可能性を示した。そして、1970年代における日本国憲法及び教育基本法の解釈の変更、すなわち発達の必要に応じた学習権保障の新解釈につながり、今ではニーズに応ずる教育や自己人生創造希求権が語られるまでに至っている。

糸賀の「福祉の思想」は、障害児に限らず、不登校・引きこもり、いじめ、相対的貧困や外国籍の子ども、戦争・災害被害やCOVID-19禍の子ども等々の特別ニーズ問題へのアプローチにも重要である。糸賀の思想形成は様々なもの、例えばキリスト教と仏教、西洋思想と東洋思想、哲学と福祉学・教育学・医学・心理学といった交差の下になされており、学際的な子ども学の視点からも国内外の研究者の連携によるさらなる探究が期待されよう。

*参照

WATANABE Akio, 2015, The Last Message of Kazuo Itoga : "Let These Children be the Light of the World", Journal of Special Education Research 4 (1), 垂髪あかり 2020 『〈ヨコへの発達〉とは何か』日本標準、等。



◎プロフィール 渡部昭男 (わたなべ・あきお)

1977年、京都大学教育学部卒業。1982年、同大学院教育学研究科博士課程満期退学。専門は教育行政学、特別ニーズ教育学、地域教育、発達保障。近著・共著に『人間発達研究の創出と展開 田中昌人・田中杉恵の仕事をとおして歴史をつなぐ』中村隆一共編 群青社、2016、『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』國本真吾、垂髪あかり共編、糸賀一雄研究会 三学出版、2021、『改訂新版 障がいのある子の就学・進学ガイドブック』日本標準、2022 ほか多数。「教育講演」とほぼ同内容の講演「ひとと生まれて人間となる：糸賀一雄からのメッセージ」(2021.11.20)のPPTスライドが入手可能(神戸大学Kernelサイト<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90008817.pdf>)。

シンポジウム

子どもと環境をどのようにつなぐのか

実践の理論に 欠かせない「界面」 という概念

鯨岡 峻 (京都大学名誉教授)



本日お話ししたいのは、子どもの療育に携わる実践者の方々の、その実践の中身に入り込んで議論するために何が必要かを考えてみたいということです。

私の主張する「関与観察とエピソード記述」という方法論は、従来の数量的アプローチでは扱えない領域に踏み込もうとするものです。客観科学では扱えない領域、それは人と人が接するときに両者のあいだに生まれる心の動きの領域です。対人実践の本質的に重要な部分は、相手の心の動きと自分の心の動きが繋がったり途切れたりしながら、そこにさまざまな感情や情動が双方に生まれ、それが時間経過の中で変容するところにあるからです。

客観科学は当事者性を排除して、常に無関与の立場の研究者が研究対象を外側から見るところに成り立つ学問です。そしてその学問の姿勢が実践の現場にも持ち込まれるために、その実践が行動中心主義に大きく傾斜してきているのだと思います。私はそこに現在のさまざまな実践現場の危機があると見ています。

療育実践の場は、本来、子どもと実践者との界面で生じている心の動きと心の動きの絡み合いの機微から次の

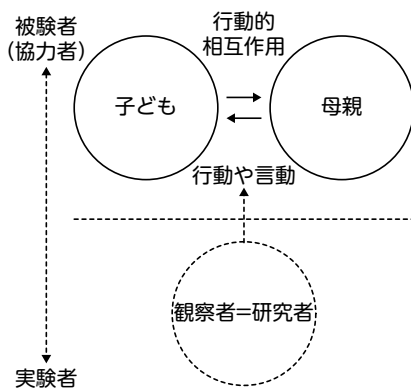
展開が生まれていく場です。実践者は子どもとの界面に関わる当事者として、子どもの心の動きを感じ取り、それに応える立場の人です。その意味でも、「界面」を強調することは実践を語る上に欠かせないはずです。

療育実践は、本来はまさに図Bのように「界面」で営まれています。動作法であれ、作業療法であれ、感覚統合訓練であれ、子どもと療育者との界面で生じていることに準拠して取り組まれているはずで、これまで「子どもに寄り添う」「子どもの身になって見る」「子どもに気持ちを持ち出す」「子どもに成り込む」などという表現で語られてきたことが、ここでは図Bの灰色の三角形部分が生まれることを意味し、そこで実践者の心に届くものが、子どもの心の動きなのです。そして、そこで得られた体験を他の人に伝えるために必要になるのがエピソード記述なのです。

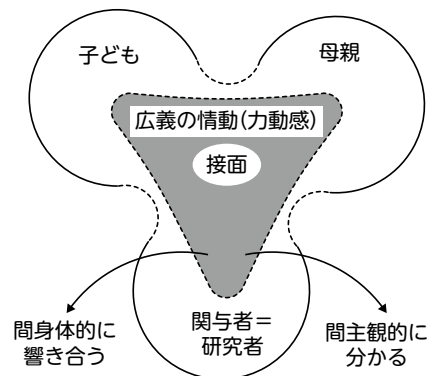
これに対して、子どもを外側から見て、子どものしたこと、言ったことだけを取り上げるというように、心の動きを問題にしない接し方が図Aだと言ってよいでしょう。行動科学はもっぱら図Aで取り組まれてきました。その影響が実践の世界にも持ち込まれて、客観的な記録を取るよという指導に繋がってきたのですが、私の考えでは、その客観科学の姿勢は界面を消す姿勢なので、本来は療育実践とは相容れないものだと思います。

*参考文献

『エピソード記述入門』・『エピソード記述を読む』・『なぜエピソード記述なのか』(以上、東京大学出版会)、『関係の中で人は生きる』(ミネルヴァ書房)



A. 客観的主義(行動科学)パラダイム



B. 界面(関与観察)パラダイム

生態心理学 (アフォーダンス)の 立場から



細田直哉 (聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科准教授)

「歩くこと」は「大地」なしではできない。「泳ぐこと」は「水」なしではできない。あらゆる「能力」はこのように「環境」に支えられている。この「あたりまえのこと」をぼくらはあまり意識していない。そして、「あの子には能力がない」などと思ったりしてしまう。でも、ほんとうに「ない」のは「能力」ではなく、それを支える「環境」なのだ。どうして、こんな「あたりまえのこと」を意識できないのだろうか？

それはたぶん、この「能力」を支えている「何か」に決まった名前がないからだ。そう考えた心理学者 (J.J. ギブソン) がこの「何か」に名前をつけた。「アフォーダンス」という名前である。「アフォード (= ~できる)」という動詞から造った新しい名詞である。日本語にうまく訳せないのでそのまま「アフォーダンス」と呼んでいる。無理に訳せば、「行動を支える環境資源」といったところである。

今頃は、「子どもの発達を支えているアフォーダンス」を保育園や幼稚園の環境のなかから見つけ出し、「保育環境のアフォーダンス事典」をつくらうとしている。「保育環境のアフォーダンス事典」が完成すれば、どうなるだろうか？ おそらく、これまで「子どもの能力不足のせい」にされてきた多くのことが実際は「環境不足のせい」であったことがわかるのではないかと。そして、「環境を変える」ことによって、「子どもが変わる」可能性がひらけるはずだ。「能力」とは「子どもの身体の内側」にあるのではなく、「子どもと環境との出会いの内側」にあるのだから。

今回のシンポジウムでは、子どもが「人間として発達すること」を支えるために保育者がどのような保育環境をつくり、どのように子どもと環境をつないでいるのかということについてお話しいたします。



ケア情報学が繋ぐ 子どもと環境



桐山伸也 (静岡大学情報学部教授)

私が主宰する「静岡大学ケア情報学研究所」では、認知症や発達障害をはじめ少子高齢社会の諸問題解決に向けて、人間尊重の情報学の視点で、あらゆる「ケア」を高度化し、安心・安全で健康な暮らしとまちづくりに貢献できる価値創造研究プラットフォームを構築してきました。

また、私が理事として参画する「みんなの認知症情報学会」では、認知症を「個性」と考え、本人と家族の視点を重視する市民情報学 (Citizen Informatics) のコンセプトで「みんなで学び、みんなを繋ぎ、みんなで知を創り出す」ことを推進しています。

ケア情報学研究所とみんなの認知症情報学会の活動の一部をご紹介します、人工知能や情報学の研究者の立場に加えて、ダウン症児の親の視点から、障害の有無という垣根を超えたインクルーシブ社会の実現に向けて、私たちは何をしたいかを、皆さんと考えたいと思います。

*静岡大学ケア情報学研究所

従来は、医療、看護、介護、療育の分野や、材料、デバイス、機器システム、住宅など「専門」に分かれて行われてきた研究開発や事業開発を、「ケア情報学」のコンセプトで有機的に統合し、多様な「個性」をもつ人々の多様な価値観に応え、心身の健康と生活の質を高めるための産官学連携の拠点として、2019年12月に浜松キャンパスに本研究所を設立。静大発ソーシャルベンチャーの「みんなの認知症情報学会」と連携し、石川県加賀市をはじめ、全国各地の医療介護施設、機器サービス等の企業と協業するオープンイノベーション体制で研究開発を進めている。高齢者の心身健康データを多面的に収集し、ビッグデータの機械学習が主流のAI技術だけでなく、さまざまなAI/IoT技術を組み合わせ、複数の観点からデータに意味付けする「マルチモーダルAI」技術をコアに、みんなが健康で豊かに生活できるまちづくりに貢献する技術開発を進めている。

*一般社団法人みんなの認知症学会 cihcd.jp

認知症の本人と家族の視点を重視するマルチモーダルなヒューマン・インタラクション技術による自立共生支援AIの研究開発と社会実装に向けて取り組んでいる。

シンポジウム 子どもと環境をどのようにつなぐのか

わたしが見ていた 幼少期の風景

山口和也 (社会福祉法人ウイング)



私は神戸市内に在住し、社会福祉法人ウイングに勤務しています。私は幼少期、病院に長くいた人間なので、外からの刺激がない分、視野が狭くなって、色々な面で保守というか受け身になってしまい、なかなか周りの意見に異を唱えることが難しくなり、『しょうがない』の名のもとに本来最低限守られなければならない権利までもが消失してしまうようなことが往々にしてありました。だからこそ、子どもたちが挑戦することを怖がらないで成功体験を積み上げ成長していけるよう皆さんには、大きな受け皿となってくれる人たちをたくさん作っていただきたいと思います。

私が、生まれ育ったのは京都府の北に位置する久美浜町という所で、1歳半から月1回の頻度で京都市内の小児施設に通っていました。その後、地元の普通小学校に入学しましたが、しだいに通学できなくなり養護学校へ行くことを勧められ小学校二年生から京都市内の施設に入園しました。入園は「歩けるようになるのであれば」という母親の一言ですんなりと決まりました。私は「絶対歩いて家に帰る」と、週5日の理学療法と作業療法に懸命に励みました。入園当時は早期発見・早期療育の名の下に、私も親もセラピストも血眼になって、文字通り訓練漬けの毎日であったそうです。そこには訓練の是非を問う余地もなければ、ほかの選択肢を選ぶ余地も全くありませんでした。それでも小学校高学年ぐらいになると訓練に対する漠然とした疑問が湧いてき、苦手な巧緻動作を意識させられる作業療法はよくボイコットしたそうです。幼少期の11年にもおよぶ訓練を中心とした生活は、家族の絆にも暗い影を落とし、今でも親との距離の取り方には苦勞しています。特に思春期には多少理不尽なことでも家の構造や親の負担を考えてしかたないと我慢する自分、もっと環境が整っていればと思う自分、決してだれも責められずに障害を悲観する自分、そのなかで揺れ動いていたと思います。それでも多くの人との出会いが「あきらめなくてもいいじゃない？」という思いにつながりました。しかし自分がどの程度その目標に向かって進んでいるのかは正直自信がなく、周囲からの「妥協して療護施設に入ったら？」という言葉に心が揺れたこともありました。

私はいま、障害児が「なぜ苦手なところをわざわざ意識させてまで訓練しなければいけないのか、生まれた時

から『have to』ばかりで、もう少し『want to』がもっとも多いのでは」と考えています。

従来の「機能障害に焦点をあてた治療をおこなえば当事者が自立する」という幻想から早く目覚め、リハビリテーションが子どもたちと家族の人生にどのような影響を与えているのか、再考する時期に来ているように思われます。

臨床の視点から

天田美恵

(滋賀県立小児保健医療センター 作業療法士)



私がお会いする身体に不自由のある子どもたちは「身体に不自由のある子ども」である以前に「子ども」であって「(肢体)不自由児」として生きているわけではありません。不自由さが重度であっても「生きる」ことや「愛される(求められる)」こと、「楽しむ」ことをあきらめている子どもに出会うことはありません。

当たり前のことですが、一人ひとりが子どもらしいニーズをもっています。顕在していなくても潜在しています。

しかし、身体の不自由さからそのニーズを満たすことは容易ではなく配慮や注意が必要なことがあります。

どのような環境かがわからない、取り巻く環境が許容できないで困っている子どもは、困っているがゆえに生じる反応で自分の身体の不自由さを強めてしまうことがあります。

自分で自由に動けない子どもにとって成長に伴う身体の長さや重さ・プロポーションの変化は、変形や動きの制限・痛みの原因となることもあります。私は、子ども一人ひとりに相応した配慮や注意を払いながら、そのニーズを満たすための子どもの可能性を見落とさずに丁寧に育てていく一方で、子どもが主体的に関わることができ環境を提供し続けながら、子どもが自分の可能性に出会う期待や実現していく喜びを体感し続けられるよう、ご家族をはじめ取り巻く支援者の方々と共有しながら関わらせていただいています。子どもらしいひたむきさや愛らしさを感じ取っていただけるようご紹介させていただきたいと考えています。

特別講演

涙も笑いも、力になる

— 院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと —

副島賢和（昭和大学大学院保健医療学研究科准教授）

院内学級は、病弱特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級のうちで病院内に設置されたものです。入院している児童・生徒の中で、本人・ご家族が希望し、医師が許可した子どもたちが通っています。治療のために教室に通えない場合は、ベッドサイド学習を行なっています。

院内学級の役割は『子どもの発達の保障』です。特別支援学校や近隣の小・中学校から訪れた教員が、医療スタッフの方々とチームとして子どもたちにかかわっています。

○ 大切にしているかかわり（副島 2020）

1. 発達を保障する（学びとあそび～日常）
2. 子どもに戻す（『今』を味わう）
3. 不安の軽減（安全・安心を感じる）
4. 感情の表出（どんな感情も大切に）
5. 感覚を発揮できる（学びを発動する）
6. 肯定的な自己イメージを育む
（社会的自尊感情と基本的自尊感情）
7. 病気に向き合う力を培う（エネルギー）
8. 喪失に向き合う力（レジリエンス・PTG）
9. 「助けて」と言える（援助希求）
10. 「ひとりじゃないよ・ひとりでも大丈夫」（自立・共生）

○ 「今」を味わう

傷つきのある子どもたちにするかかわりは「あなたはあなたのままでいい」、そして「あなたがそこにいるだけですてきだと思っている人間がいるよ」を伝えることだと考えています。そのためには「あなたが感じている感情を、一緒に味わっている人間がいる」ということを伝えることが大切です。子どもが「おいしいね」と言ったら「おいしいね」、「痛いね」と言ったら「痛いね」というように、子どもたちが『今』感じている感情が間違っ



ていないと思えるように働きかけることです。それが、その子の生きる力となるはずなのです。

○ 感情表出の理解（小林正幸, 2009）

- ・ 怒り：他者や周囲に変わってほしいという「願い」
- ・ 悲しみ：苦境を分かち合ってほしい、助けてほしいという「訴え」
- ・ 喜び：誰かと分かち合うことで加速される
- ・ 恐怖や不安：問題があり、それを解消しなければならないという強い願い

○ 教師の大切な4つのかかわり（小林正幸, 2009）

- ・ 本人の好きなこと、得意なことを探り、その面で付き合うようにする
- ・ 活躍の場を与える
- ・ 本人が安心していられる場所を作る
- ・ 不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるようにする

○ ケアする人のケア（Dr.Patch = Adams 2008）

I love People、 I am Hero、 Smile、 Karma、 Creative、 I can do it、 Science + 仲間（あかはなそえじ）



◎プロフィール 副島賢和（そえじま・まさかず）

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授、学校心理士スーパーバイザー。ホスピタル・クラウン。1966年、福岡県生まれ。89年、都留文科大学卒業。東京都の公立小学校学級担任として勤務。99年、東京都の派遣研修で、在職のまま東京学芸大学大学院にて心理学を学ぶ。06～13年、品川区立清水台小学校さいかち学級（昭和大学病院内）担任。14年4月より現職。へるす出版小児看護誌に「あかはなそえじの子どもエナジーステーション」連載中。

パネルディスカッション

早期電動移動機器使用が子ども達の発達に及ぼす影響

話題提供1

臨床の視点から

西島和秀 (聖ヨゼフ園 作業療法士)



重症心身障害児に対する考え方は、障害が重度であるため環境との相互作用が判断しにくく、医学モデル主体となる傾向にあります。今回の症例も一日のほとんどが低覚醒状態であり、その原因は本児の心身の状態にあるとされてきました。しかし、24時間ビデオ撮影を行い一日の覚醒状態の推移と環境との関連を評価したところ、Mothering (抱っこ、身体接触、遊び等) 時のみ活動的な覚醒状態が観察され、本児の発達のためには Mothering のような濃密な人の関わりが必要であることが示唆されました。しかし Mothering の時間は1時間12分と短く、発達の機会が十分に与えられていませんでした。また、自発的な移動手段を持っていなかったため、関わり合いはすべて受け身的であることがわかりました。

これらの評価内容をもとに病棟スタッフと協働し Mothering の時間を計画的に1日3時間 (1時間×2、30分×2)、週5回の頻度で1年4ヵ月間継続し行い、また自発的な移動を目的として Baby Loco を導入しました。Baby Loco を使用した自発的な移動が可能となり、明らかな覚醒状態の向上に伴い、人に対する自発的な働きかけや、反応性の向上が観察されるようになりました。再度24時間ビデオ撮影評価を行った結果、活発な覚醒状態が多く観察され、自発的に外界に向かう目的的な行動が観察されました。

今回の取り組みでは、Baby Loco による移動経験が覚醒状態や発達に影響を及ぼしたか否かを検討することはできません。しかし、Baby Loco による移動経験が本児に影響を与えている場面のエピソードについて話題提供できればと思っております。

医療福祉センター聖ヨゼフ園は50年の歴史を持ち、約120名の利用者が生活をされています。高齢化と医療的ケア度の重度化が進む中で、少数の小児に対する保育や学習、日中活動支援の充実が課題となっています。外来の重症児たちは、地域に活動機会があるため、移動手段を獲得することで、参加が増え、生活が変わる様子を見ることが出来ます。一方で、入所の重症児たちは楽しみとなる活動や場が少なく、移動手段に加え、移動する目的をつくる必要があります。私はこの一年、移動した先の楽しみを病棟と協力して作っていく取り組みを行ってきました。子どもが楽しみを見つけた時の「近づきたい」という目の輝きを見るときに、その意欲を育てることの大切さを感じます。

話題提供2

教育の視点から

篠原 勇 (京都府立与謝の海支援学校教諭)



1974年竹野廣之、松枝秀明、光野有次の3名は東京練馬区に子どものための福祉用具をオーダーで作る日本最初の工房、「でく工房」を開設しました。彼らは重度障害のある子ども達の座位保持装置などを作る中で、「人はみな起きて生活する権利がある」として、これを「起きる権利」としました。重度の障害があったとしても身体を起こして生活することは人としてあたりまえの姿なのです。

では、「動く」ことはどうでしょうか。自分の意思で動くことは本来、生物またはヒトとして当たり前の姿です。子どもたちは自ら動くことによっていろいろな情報を収集し、様々なことを経験し、社会とのつながりを実現しています。障害によって、この機能が阻害された場合、それだけで発達上大変大きな不利になります。ですから子どもたちに合った手立てにより自分の意思で自由に動くことを保障することが大切であると考えます。「動く」ことを通した発達保障。「動く権利」です。

子どもたちが自らの意志で動くための手立てには様々なものがあり、それらの手立てに優劣はありません。どのような手立てであろうとも自分の意志で動くことが大切であると思っています。この手立てがうまくいったとき、子どもたちは驚くべき姿を見せてくれます。その表情は喜びと自信に満ち溢れています。私たちは「そんなことできる力もってたんか!」と思わず口にしてしまうほどの喜びを感じます。そこには一体感、力動感、幸せ感が一杯に広がっています。

そして同時に私たちは子どもたちの力を低く見過ぎてしまっていたことを深く反省させられるのです。「障害が重いからできない。発達の課題ではない」などと考えがちですが、子どもたちはできないのではなく、実は機会を与えられていなかっただけなのです。

もしかしたら、障害を重くしているのは、子どもたちに関わっている私たちの対応のまずさなのかもしれません。

話題提供3

工学の視点から

安田寿彦 (滋賀県立大学工学部機械システム工学科教授)



障害物を自動的に回避する電動車いすをニューラルネットワーク (NN) を使って作ったことがあります。車いすの左にある障害物を右旋回して回避する環境で NN が学習すると、右旋回は得意だが左旋回はできない NN に成長します。一方、左旋回で障害物を回避する環境で育てた NN は左旋回が得意で右旋回ができません。左旋回も右旋回も必要な環境で育てると両方できますが、左旋回能力は左旋回が得意な NN に負け、右旋回能力は右旋回が得意な NN に負けます。そこで、NN に環境に適合できる柔軟性を持たせると、柔軟性のない左旋回や右旋回が得意な NN よりも優れた性能を発揮しました。人工的な NN は人間の脳の情報処理を模擬しています。これまでに述べたことは、柔軟性のある幼少期から様々な環境の中で自分の力でいろんな経験をすることが大切なことを工学的に証明しています。

びわこ学園で PT や OT や様々な方と共同研究を進め、学会などで発表しました。早期移動体験の有効性を理解してもらえれば、子どもたちのための電動移動支援機器を製品にしてくれるメーカーがあるのではと考えていました。しかし、市場性が不明確で公的支援がないため、製品化には至りませんでした。そこで、現場の声を大きくするために、小さい時から電動移動支援機器を使う子どもたちを増やす必要があると考えて、「電動移動支援機器の製作ワークショップ」を行う Kids Loco Project を始めました。びわこ学園で、“自立障害物回避能力など高機能の車いすでなくていい。子どもたちの適応能力はすごい。単純で子どもたちが使いやすい機器がよい。”という気づきがありました。それならば、工学的知識がなくても作ってもらえ、電動移動支援機器を使ってくれる子どもたちが少しずつ増えました。

利用者の声が、今仙技術研究所の電動移動支援機器の開発と市販につながり、「早期移動体験のための電動移動支援機器を世の中に供給する」という Kids Loco Project のこれまでの役割は終わりました。これからは、電動移動支援機器製作を通じて広がった和を、さらに広げて日本のどこでも早期移動体験が行われるようにすることが Kids Loco Project の仕事ではないかと考えています。

話題提供4

家族の視点から

濱田知加 (保護者)



11歳の健常児の息子と8歳の福山型筋ジストロフィーと聴覚障害の娘の母です。娘は身体障がい者手帳1種1級、療育手帳A1です。自力では、おすわりやハイハイなどはできません。発語はありません。

娘は、平成25年10月に、高塩純一先生を通じて baby loco に初めて乗りました。当時、1歳5か月の娘は、初めて自力で移動できたことに不思議な表情をしました。しかし、会場を3周する頃には、「スイッチを押すと進む」ことが理解できはじめ、出会う人に笑顔を振りまき、手足をパタパタ動かして喜びを表現していました。たった3周の間に、娘の表情・オーラが変わったのを、私は体感しました。その後、同年12月に、baby loco をプレゼントしていただきました。家の中で baby loco に乗っていると、ジョイントアテンションが出始めました。単なる「指さし」ではなく、自分自身の興味あるものを母に【教えたい・伝えたい】という感情が芽生えだしたのです。興味あるものを指さした後で、しっかりと私の顔を見て【ねえ、お母さん、あれ見て・・・】という目をまん丸にした生き生きとした表情で、彼女の感じている世界を教えてくれるようになったのです。

1歳5か月から2歳8か月までは、丸い形のスイッチで、押すと前に進むものでしたが、2歳8か月時点からスイッチをジョイスティックに変え、あらゆる方向に動けるようになりました。家の中の様々な物に、近づき、後ろに回って、かくれんぼしたり、かけているタオルを落としたり、引き出しの中の物を出して落とすいたづらをしたりしていました。ダイニングテーブルに、当たらないギリギリの場所で、前後に微調整して、自ら体を傾けてテーブル下にもぐりこんでいった時には、びっくりしました。

でも、娘はとても楽しく能動的に遊んでいたのです。障害があっても、自分で動くことができないと「受け身」になりがちです。ですが、娘は、電動で「興味のあるものに向かって自分の意思で動く」という体験を通して、「自分でできた」「楽しい」という経験を積み重ねています。こういったことが、次の行動への意欲につながります。日本では、乳幼児期からの電動の使用は一般的ではありません。しかし、「自分でできる」経験は知的な面や社会性の向上につながっていきます。

障害のある子どもにも自分の意思で動く経験がもっと広がっていくことを願っています。

自主シンポジウム

本学術集会の「自主シンポジウム」では、2件のオンラインシンポジウムと、会場とオンラインの両方で行う1件のハイブリッドシンポジウムが行われた。



オンラインシンポジウム①

神経生理学的手法を用いた子ども達の応答性理解の取り組みと 応答性を引き出すための関係発達の視点

司会者：後藤純信^{1,3,4}

登壇者：平野大輔^{1,2} 後藤純信^{1,3,4} 勝二博亮⁵ 谷口敬道^{1,2}

(1 国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科、2 国際医療福祉大学大学保健医療学部作業療法学科、
3 国際医療福祉大学医学部医学科生理学教室、4 国際医療福祉大学福岡保健医療学部作業療法学科、
5 茨城大学教育学部障害児生理学研究室)

医師であり臨床神経生理学が専門の後藤が子どもたちの個別の応答性を知るための神経生理学的手法を紹介。神経教育学と特別支援教育が専門の勝二が教育の立場から、作業療法士の平野がリハビリテーションの立場から神経生理学的手法を用いた取り組みを紹介し、最後に作業療法士の谷口が情動的コミュニケーションおよび関係発達の視点から対象児（者）との関わり方を提言する。

オンラインシンポジウム②

保育者・教員養成校における実習指導に関する一考察

— 実習生のメモの分析を中心に —

コーディネーター・司会者：田中卓也（静岡産業大学）

話題提供者：松村 齋（大垣女子短期大学） 時田詠子（群馬医療福祉大学） 大橋淳子（大垣女子短期大学）
加藤 緑（清和大学短期大学部） 中島真吾（中部大学） 小川知晶（川崎医療福祉大学）

保育者養成および小学校教諭、特別支援学校教諭養成、福祉教諭養成（中学校・高等学校）に焦点をあて、コロナ禍の現状をふまえた実習指導の在り方や特徴を見い出すとともに、実習生のメモの分析や課題について考える。

ハイブリッドシンポジウム①

ギフティッドの的確な理解と支援のために

— 心理・医療・教育の観点から —

登壇者：角谷詩織（上越教育大学） 榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授・Child Research Net 所長）
泊岩水月（放送大学・Langara College（ESL コース）） 松村暢隆（関西大学名誉教授）

並外れた才能を示すあるいは秘めている子どもはギフティッド児と呼ばれる。ギフティッド児は障害の有無にかかわらず、社会情緒的な困難を経験することが多い。それは学校を中心とする環境と本人のニーズや特性とのミスマッチによるところが大きい。心理・医療・教育の立場から、ギフティッド児をめぐる現状や問題と、その理解・支援の可能性を考える。

重い障害のある人の親と ともに考える支援のあり方

児玉真美 (日本ケアラー連盟代表理事)

司会: 木下 真 (福祉ジャーナリスト/日本子ども学会事務局長)

重症児者のケア・ニーズは、「身体障害のニーズ+知的障害のニーズ」ではない高い個別性、専門性が求められます。これまで、そのような専門的ケア資源は、重症児者施設に集積されてきました。しかし、現状では施設の数に限られ、重症児の9割近くは家族、主に母親のケアによって支えられています。

日本社会は家族を含み資産と考えて、ケアラーと呼ばれる家族介助者を支援する法律も制度もほとんどありません。ときに生身の人間の限界を超えた介護をしても、親なのだからやって当然と見なされて、支援の手は十分に差し伸べられません。

親は一人の人間としてではなく、介護機能の担い手として見られ、「ちゃんと育児と療育の機能を果たしているか?」といつも「評価」のまなざしを向けられています。そのような親頼みの社会では「親亡き後」を誰に託したらいいのか不安でしかありません。私たちは、親が元気なうちから、子どもも親も、どちらもが一人の人間として尊重され、自分らしく生きられる社会を作っていかなければなりません。



子どもたちからの SOS

悠々ホルン (シンガーソングライター)

司会: 松嶋秀明 (滋賀県立大学教授)

私は、これまでに悩みを抱える子どもたちから、7000を超える数のメッセージを受け取ってきました。その内容は、家庭不和、いじめ、虐待、不登校、ひきこもり、自傷行為、援助交際、精神疾患、両親のDV・離婚、自殺願望などさまざまです。そんな子どもたちのSOSを音楽や動画を通して社会に伝える活動をしています。

大人は、子どもたちが助けを求めると、「そんなことで悩んでいてはダメだ」「世の中にはもっと不幸な人がいる」などと、励ますつもりで言葉をかけますが、悩みは人それぞれで、何を辛いと感じるかも人それぞれ、他人と比べるなどできません。「苦しかったら助けを求めればいい」と言っても、SOSを受け取ってくれる相手がいないから苦しんでいるのです。

子どもたちが安心して悩みを打ち明けられる環境を作るには、まずは大人自身が変わらないといけないのではないのでしょうか。子どもたちが「ありのままの自分」を出せるような人間関係を築くことが何よりも大切だと思います。



理事長講演

これからの障害児支援を考える

榎原洋一 (日本子ども学会理事長)



以前から私の心に引っかかっていることがあります。それは「支援」とはなんだろう、ということです。

例えば赤ちゃんは、授乳やおむつかえなど親や保育者の木目の細かいケアがなければ生きてゆけません。また私たちの多くは、自分で食べ物を生産していませんから、お百姓や漁師のおかげで食べ物にありつくことができます。では赤ちゃんや私たちは、保育者や農民漁民の支援を受けているのでしょうか? 多分誰もそうは思っていないと思います。何か違いはあるのでしょうか? 食べ物は対価を払っているから、と説明できそうですが、赤ちゃんは何も払っていません。

年老いたら子どもに面倒をみてもらうから、というの

も昔はそうでしたが、今は当てはまりません。赤ちゃんも親、食糧生産者と消費者と関係は様々ですが、要は人は一人では生きてゆけないという厳然たる事実があるのです。そうした様々な関係性の中で、どうして障害児へのケアは「支援」と呼ばれるのでしょうか?

もう一つ心に引っかかっていることに、インクルージョンがあります。なぜ、インクルージョンと言挙げしなくてはならないのでしょうか。多分それは、これまでそして今でも、一部の子どもの大人が、世間から疎外されている(エクスクルージョン)状態にいるからだと思います。「支援」や「インクルージョン」を、そうした視点で捉え直してみたいと思います。

ポスターセッション web

第17回子ども学会議では、43件のポスターが Webで発表された。

ルーム1

演題番号	筆頭発表者	タイトル
1	瀬尾知子	日本の園での食事場面における保育実践 食べ終わるまで「待つ」という行為に着目して
2	伊豆田麻子	逆境にある子どもを描いた絵本の分析 - 困難な状況で子どもは何を必要とするのか-
3	花岡清美	子どもと保護者のための野外音楽活動プログラムの実践報告
4	桐川敦子	子ども主体の保育実践実現迄のプロセス - 経験年数5年に至るまでの保育者の体験から-
5	丸山ちはや	地域財産としての児童文化財の現状と記録 - 岩手県岩泉地区に残る子どもの伝承遊び調査-
6	深町澄子	子どもの空手学習におけるリズム活動を用いた身体動作の特徴と支援
7	田中卓也	戦時体制下における『愛国少年』の読者に関する一考察
8	田中あゆみ	本人の参加を促す意思決定支援をしたことで最適な電動車椅子使用が可能になった症例
9	南雲まき	肢体不自由児の美術制作における画材、素材、使用方法の工夫の共有
10	渡邊梨央	多胎児をもつ特定妊婦の特徴および助産師の支援と課題
11	福澤利江子	ロールプレイを活用したドゥーラ（出産付き添い者）トレーニングの開発
12	鈴木祥子	コロナ禍の中で「できること」を考える - 地域子育て支援センター B から-
13	安藤寿康	小学生から高校生までの学業の成績評定に及ぼす社会経済的地位と教育環境・学習環境との関連に関する行動遺伝学的検討
14	西垣美穂子	平成の大合併における市町村の保育の変遷 - 過疎関係市町村の合併協議会に着目して-

ルーム2

15	寺井 薫	保育者が専門知識を学び続けることは、多様な子ども主体の保育の要
16	頼 小紅	ASD 児の思いを受け止める際の保育者に求められる対応の質：保育場面の関与観察から
17	伊藤貴大	放課後等デイサービスにおける物的環境調整によるコミュニケーション行動の促進に関する事例報告
18	水野友有	「痕跡」から探る他者の営み - 「つぶされた空缶」の考古学的手法による分析の試み-
19	金 瑛珠	保育者の記録から読み取る幼児の集団としての育ち - 卒園記念文集などの分析を通して-
20	古谷 淳	性役割期待によって生じる男性保育者のナレッジベース形成について
21	大江まゆ子	夜間保育を行う認可保育施設長に生起する心情の考察：子どもの育ちの環境をめぐって
22	仁木和久	言語機能 Triple Mirror Neuron 起源論 脳の言語機能の起源を人間行為を支える Enactive Brain II に探る
23	仁木和久	人間行為と「学びと成長」を支える脳の拡張モデル Enactive Brain II の提案
24	緩利 誠	学校教育の成功をどう定義づけるか？ - Enactive Brain の仕組みとその発達の観点から-
25	鳥海弘子	オンライン式授業や保育実習が保育士のキャリア形成に与える影響に関する研究
26	梅田真樹	大学生は絵本体験をどのような時に思い出すのか
27	廣瀬翔平	幼児のモノのやりとりにもみられる特徴 - 3歳児クラスと5歳児クラスの比較-
28	葉口英子	「幼保の時間」の音楽番組にみる領域（音楽リズム）から〈表現〉への変化の対応
29	森谷路子	継続的な遊び込み経験が子どもの遊び範囲の拡大と身体活動量に与える影響

ルーム3

30	酒井 厚	中高生のコロナ禍休校期間における生活の変化と親子関係および精神的健康との関連
31	安藤布紀子	社会的ハイリスク状態にある子どもへ包括的性教育支援の実践報告
32	岩井祐一	知的障害特別支援学校高等部における VR を活用した授業の実践試行
33	大崎章弘	ICT を活用して子どもの科学的概念を育む物語創作ワークショップの開発と実践
34	渡辺直人	保育学生の ICT 導入に関する意識
35	内海緒香	生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価
36	末松加奈	幼児期における科学的探究心の芽生え - 探索的な調査結果からの一考察-
37	佐藤朝美	創造的な Digital Play を支援するオンライン・ワークショップに向けた予備調査
38	藪田弘美	ニュージーランドの保育評価 learning story に基づく、日本の森のようちえんの活動の分析
39	油川さゆり	幼児のピアノレッスンにおける指導者の発話分析②
40	鈴木幸子	幼稚園の帰りのあいさつルーティンにおける保育者の意図 - 3歳児と4歳児の比較検討-
41	松崎真実	わらべうたの音楽構造と私たちの音楽認識の変容
42	渡邊花穂	日本語指導のための「先行学習」-日本人学校での実践の分析を通して-
43	戸次佳子	絵本の研究 - 絵本に描かれた主人公からその時代の子どもの観・教育観を読み解く試み-